

日本赤十字社発祥一四〇周年

日本赤十字社発祥の地をめぐる

玉名編

日本赤十字社の発祥は皮肉にも壮絶な戦争でした。明治維新後の1877年（明治10年）におきた西郷隆盛率いる「薩軍」と政府軍「官軍」の戦い、西南戦争です。2月15日の西郷隆盛の拳兵に始まり、2月19日の熊本城炎上、熊本城強襲、高瀬大会戦、田原坂の戦い、そして植木や大津、人吉の戦いへと続きました。中でも田原坂は、熊本城を目指す官軍と薩軍が3月4日から17日間も一進一退を繰り返した西南戦争最大の激戦地となりました。当時、戦傷者の救護の必要性を訴えていた元老院議員の佐野常民は、田原坂の戦いをきっかけとして、明治政府に日本赤十字社の前身となる「博愛社」設立を請願しました。



日本赤十字社 発祥の地の木標

弥富村村長（塚本平次氏）が18歳の頃、仮県庁で佐野常民から名刺を預かり富岡権令（知事）に取次いだという話を光蓮寺（多田氏）から、元弥富小学校校長（岩尾氏）を経由して玉名高等家政女学校校長（寺本直樹氏）に伝わり、後に、佐野子爵家に確認し事実であることがわかり、木標（写真右奥）が建てられました。

**玉名女子高等学校
（旧玉名高等家政女学院）**
幕末細川藩高瀬支藩邸があった場所での後崎崎原小学校となり、西南戦争の際は仮県庁が置かれていた。佐野常民がここで会社の事務を開き、仮県庁・裁判所と同一の家屋で博愛社事業の端を興したと伝えられています。



日本赤十字社 発祥の地の碑

昭和51年12月1日、日本赤十字社発祥の地の木標があった場所に建てられた石碑。玉名市長橋本二郎書。裏面には、「勅令を奉じて戦況を見にきた佐野常民氏は、仮県庁で富岡権令と会い、悲惨な戦傷者の救護をするため博愛社設立について徹夜で相談した。古老の話でこの場所には日本赤十字社発祥の地の木標が建てられた。」と伝えられています。



光蓮寺

軍団病院の一つ。寺の入口横には広い紙に手書きで、「本堂廊下の板について、明治10年西南戦争の時、本堂が野戦病院（高瀬病院）となり、沢山の負傷が運び込まれた。中には戦死された方も由（当山にその方の墓石があります）。明治天皇は佐野常民にその様子を見聞するように派遣されました。佐野氏はその様子を見て、帰国後大給恒と両氏で博愛社を創設されました。それが現在の日本赤十字社です。玉名が日本赤十字社の発祥の地の所以です。（これは当山住職だった澄圓法師が実証されました）戦場となり野戦病院となった本堂廊下が大変破損したので、新しい廊下を桜井家（金沢家）が寄進されました。（大工さんは高木寿太郎）」と書いてあります。

官軍兵の墓石

お寺の裏には官軍への墓4基があり、墓石の裏には出身地のほか高瀬病院と刻まれています。戦死した官軍兵の名前は靖国神社の名簿とも一致しています。



承久寺

軍団病院の一つ



繁根本八幡宮

官軍の本宮跡



西郷小兵衛 戦没の地碑

西郷隆盛の末弟。西南戦争で薩軍第一大隊第一小隊長を務め、一八七七年二月二十七日、肥後国高瀬河南（現在の熊本県玉名市）の戦いで官軍の銃弾を受けて戦死した。享年31。

